

公津原再発見

印旛沼に栄えた文化

成田ニュータウンの遺跡展

平成二十八年度出土遺物公開事業



槍先形尖頭器
(天王・船塚11号墳盛土中)



獣形鏡(瓢塚16号墳)



金銅製の鈴(瓢塚40号墳)



ミミズク形土偶頭部 (Loc.39)



人物埴輪頭部(瓢塚32号墳)



梵鐘(八代椎木採集資料)
(国立歴史民俗博物館所蔵)



経筒(天王・船塚11号墳(経塚))

千葉県立房総のむら

印旛郡栄町龍角寺1028 ☎0476-95-3333

7月16日(土)～9月25日(日)

【休館日:7月19日・25日、8月1日・8日・15日・22日・29日、9月5日・12日・20日】

12月10日(土)～平成29年2月26日(日)

【休館日:12月12日・19日・25日～31日、1月1日・4日・10日・16日・23日・30日、2月6日・13日・14日・20日】

ワーク
ショップ

内容:勾玉作り・カラー拓本

日時:平成28年8月20日(土) 13時30分～16時

場所:千葉県立房総のむら 風土記の丘資料館

受付:当日随時受付

古墳
めぐり

日時:平成28年9月10日(土) 13時30分～15時30分

見学場所:公津原古墳群

集合場所:赤坂公園または房総のむら風土記の丘資料館

定員:赤坂公園集合は30名、房総のむら風土記の丘資料館は25名

※房総のむら風土記の丘資料館からは、マイクロバスで送迎

申込み:先着順、千葉県立房総のむら(☎0476-95-3333)

講演会 「印旛沼に栄えた文化」

日時:平成28年7月24日(日)

午前10時30分～午後3時

会場:成田市立図書館視聴覚ホール

成田市赤坂1-1-3 成田市立図書館2階

当日
先着受付
150名

講師:特別講演 田中 裕 (茨城大学人文学部教授)

講演 萩原 恭一(千葉県立中央博物館副館長)

栗田 則久((公財)千葉県教育振興財団)

※ 詳細は下記までお問合せ下さい。

【主催】(公財)千葉県教育振興財団 【後援】千葉県教育委員会・成田市教育委員会

【問合せ先】(公財)千葉県教育振興財団文化財センター ☎043-424-4850 http://www.echiba.org/bunkazai_top.html

ごあいさつ

千葉県では、年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られております。当財団の調査成果については、遺跡見学会や展示会をはじめ、ホームページや広報紙『房総の文化財』などの刊行物等で順次御紹介してまいりました。

今回企画した展示会は、成田ニュータウンの建設に伴って調査された「公津原遺跡群」の中から、主な遺跡の発掘調査成果を、「成田ニュータウンの遺跡展－印旛沼に栄えた文化、公津原再発見－」と題して紹介するものです。

印旛沼東岸の歴史を築いてきた旧石器時代から中世にかけての多様な文化の様相を感じていただき、埋蔵文化財保護への御理解をお願い申し上げる次第です。

最後になりましたが、御協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- 凡例
- 1 本図録は、平成28年度出土遺物公開事業「成田ニュータウンの遺跡展」の展示解説図録です。
 - 2 展示資料のうち、奈良時代の梵鐘(復元複製品、原品は国立歴史民俗博物館所蔵)は千葉県立中央博物館所蔵で、他は千葉県立房総のむら所蔵です。
 - 3 本展示は、文化財センター長上守秀明・整理課長山口典子の指導のもと、主任上席文化財主事今泉潔・上席文化財主事栗田則久が担当し、図録の執筆及び編集は栗田が行いました。

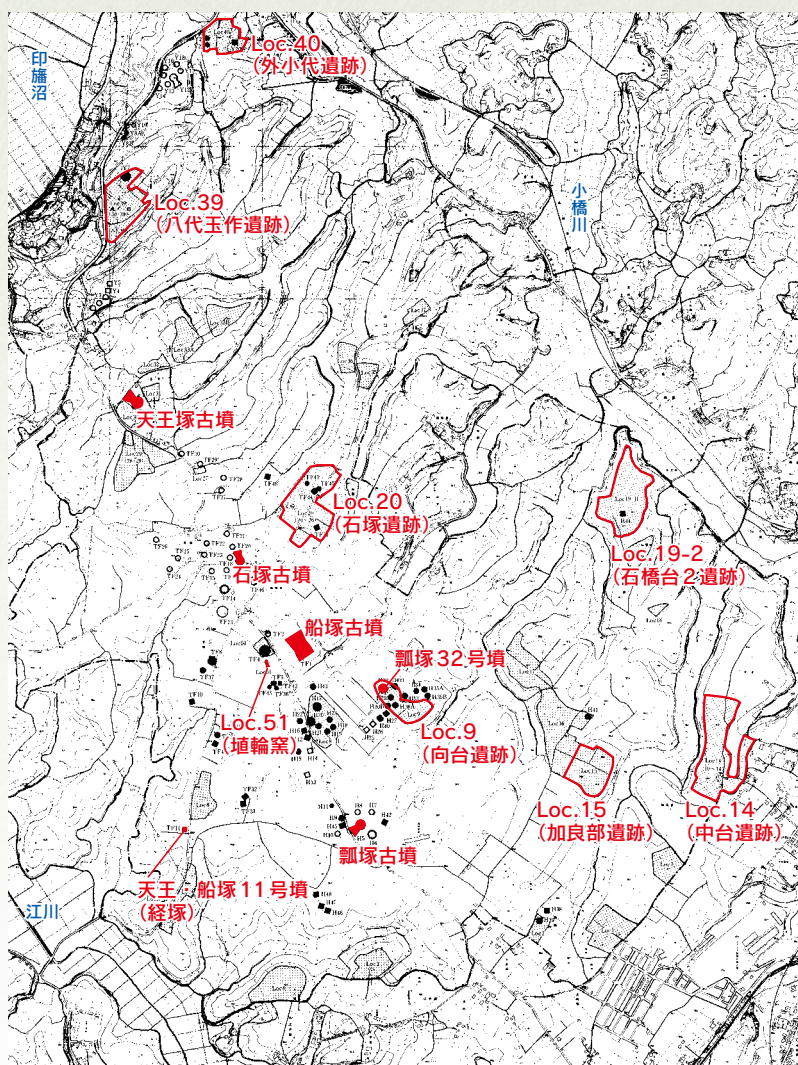
成田ニュータウン

新東京国際空港の設置に伴う空港関連企業ならびに一般流入人口を計画的に受け入れることを目的として、昭和43年度に計画面積487ヘクタール、計画人口6万人の成田ニュータウン建設の事業計画が決定しました。

同年度には、この計画にもとづいて、地区内の埋蔵文化財分布調査が行われ、公津原古墳群などの周知遺跡のほかに、新たに40か所の遺物散布地が発見されました。

これらの遺跡の取扱いについては、慎重な協議を重ね、船塚古墳などの主要な古墳ならびに八代玉作遺跡などの重要な遺跡は、史跡公園として整備することとなり、他の45地点と60基の古墳を対象として発掘調査を実施しました。

調査された集落や古墳については、その後の整理作業を経て、昭和50年に『公津原』、昭和56年に『公津原Ⅱ』の2冊の発掘調査報告書として刊行され、多くの貴重な成果を得ることができました。



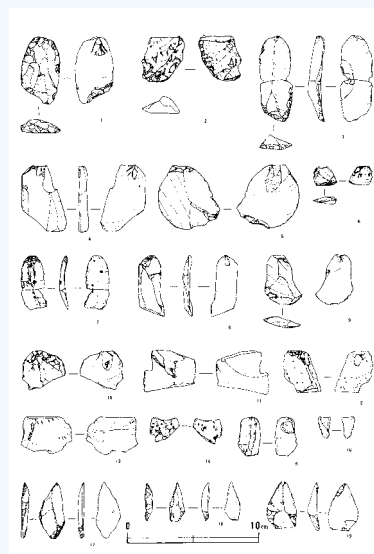
公津原遺跡群内の主な遺跡と古墳位置図

旧石器時代

公津原遺跡群内での旧石器時代の調査は1か所のみで、Loc.9 (向台遺跡^{むかいだい})内の瓢塚^{ひまご}12号墳の墳丘下から旧石器時代終末期の石器群がまとまって見つかっています。ほかには、瓢塚11号墳から16点、瓢塚15号墳から9点、天王・船塚11号墳から尖頭器2点など、散発的ながらも比較的広い範囲でほぼ同時期の石器が確認されています。

公津原遺跡での旧石器時代の調査は、調査期間や精度など種々の制約がありましたが、千葉県における旧石器時代研究の黎明期の資料として学史的に意義深いものがあります。

瓢塚12号墳の発掘の際に、墳丘下から石器群が出土したために、この地点をLoc.9遺跡と名付けています。立川ローム層第Ⅲ層(ソフトローム層)から、遺物集中地点2か所と55点の石器が発見されました。時期は旧石器時代終末期で、東内野型尖頭器の関連資料がみられます。石器に二次加工率が高いことから、多くが製品あるいはそれに近い状態で搬入されたことがわかります。また、破損した石器にも再加工を施すものがあり、徹底的に使い尽くしたようです。



Loc.9 第Ⅲ層出土の石器

縄文時代



015号竪穴住居跡全景



後期末～晩期初頭の土器

Loc.39 (八代玉作遺跡^{やっしろたまづくり})

成田ニュータウン地区内の縄文時代の遺跡は少ないですが、Loc.39遺跡から、縄文時代後期～晩期の竪穴住居跡が6軒見つかっています。特に、015号竪穴住居跡は、直径7.5mほどの大きな住居で、炉が2か所設けられました。北側の壁に沿って10cmほど高いテラスが半周ほど巡り、そこに、粗製の深鉢形土器が並んで置かれていました。ほかには、土偶などのマツリの道具も確認されています。



015号竪穴住居跡北壁側遺物出土状況



晩期のミズク形土偶(頭部)

弥生時代

Loc.40 (外小代遺跡^{そとこだい})

当地区内の弥生時代の遺跡も縄文時代同様小規模なものですが、Loc.40遺跡から、弥生時代後期の竪穴住居跡が15軒調査されました。特に、074号竪穴住居跡からは、土器の表面全体に縄文を施文する北関東の土器の影響を受けた土器が多く出土しました。この住居には、紡錘車と思われる土製品も伴っていました。



074号竪穴住居跡全景



後期の北関東系甕



文様が付けられた紡錘車

古墳時代前期の集落と玉作り

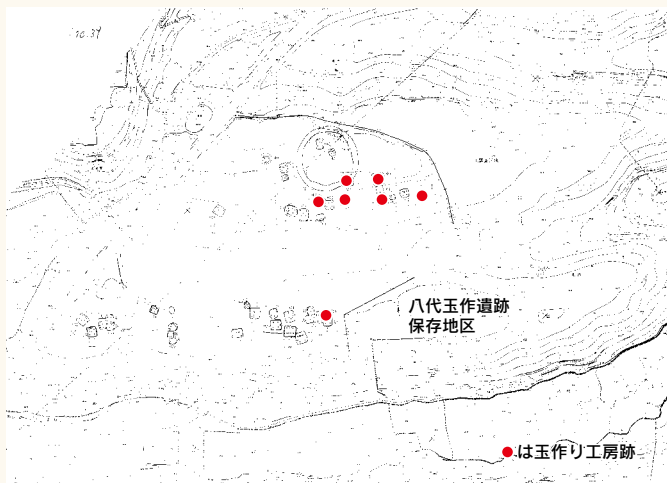
古墳時代のはじめ頃は、弥生時代の影響を残す集落がみられる一方で、畿内地方や東海・北陸地方の土器やその影響を強く受けた土器が集落に入ってくるにより、新たな時代の幕開けを迎えるようになりました。

このような土器をもつ集落は県内各地で見つっていますが、公津原遺跡群では、調査範囲の北西端に位置するLoc.39（八代玉作遺跡）とLoc.40（外小代遺跡）に集中しています。この頃に、公津原の地では、玉作りが開始されるようになります。

Loc.39（八代玉作遺跡）

この遺跡は、昭和37年・38年の調査により、古墳時代の玉作り工房跡が確認された著名な遺跡で、昭和52年に千葉県指定史跡となっています。

発掘調査は昭和46年8月に行われ、古墳時代の玉作り工房跡7軒、竪穴住居跡16軒などが見ついています。この遺跡は、弥生時代後期に閑散とした集落が営まれますが、古墳時代前期に玉作り工房を中心とした比較的大きな集落が形成されます。



Loc.39の遺構配置図



Loc.40の航空写真

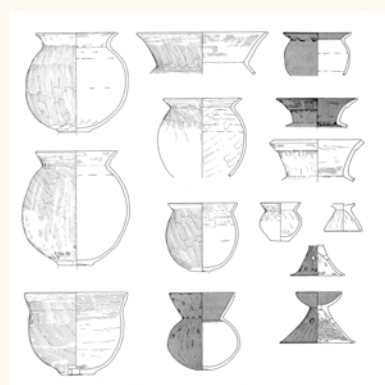
Loc.40（外小代遺跡）は、Loc.39の北東600mほどに位置しています。古墳時代前期の竪穴住居跡22軒と玉作り工房跡8軒が調査されました。この遺跡の状況は、Loc.39とほぼ同じ推移をたどっており、古墳時代前期に玉作り工房を含む集落が新たに形成されるようです。

Loc.39を含めて考えると、古墳時代前期に、管玉製作を主体とした技術者を含む集団移住が、この両遺跡でほぼ同時に展開していったようです。

Loc.39とLoc.40は、緑色凝灰岩(グリーンタフ)を石材として主に管玉を製作していた工房が集中的に営まれている点が注目されます。

千葉県では、材料となる石が産出されないため、県外に入手場所を求めることとなります。その入手先としては、北関東の栃木県あるいは群馬県が考えられます。かつて、印旛沼は、「香取海」と呼ばれる内海の一部であり、鬼怒川などがこの内海に流入していました。これらの河川を利用した水上交通によって、石材が当地域に持ち込まれたものと考えられます。

これらの遺跡では、緑色凝灰岩の原石の出土がないことや、完成品が極めて少ないこと、小片にまで再加工を加えていることなどから、原産地である程度小さくされた石材を持ち込み、極限まで管玉製作を行ったうえで製品はすべて供給したことが想定されます。まさに、節約志向型の玉作りが行われたようです。



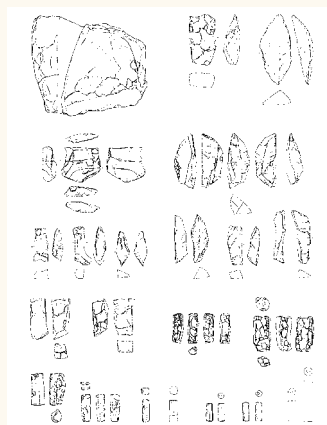
前期の土器(約1,700年前)



Loc.39 010号玉作り工房の石材出土状況



石製品未成品(Loc.40)



Loc.40の管玉製作工程

古墳時代中期の集落と石製模造品製作

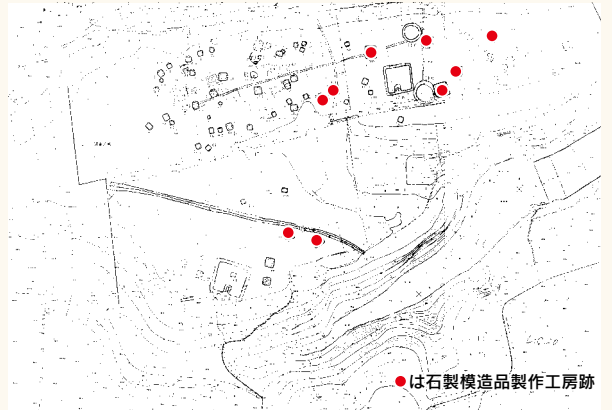
千葉県の下総を中心とする地域は、全国的にみても、石製模造品の製作遺跡が数多く存在する地域として知られています。特に、印旛沼東岸地域は、現在でも「玉造」という地名が残っているように、このような遺跡が集中しています。

成田ニュータウン区域内の古墳時代前期の玉作遺跡は、印旛沼を直下に見下ろす台地の縁辺部に営まれていましたが、古墳時代中期になると、石製模造品の製作遺跡は内陸に進出し、北東の小橋川と南西の江川に挟まれた台地上に位置するようになります。

Loc.20 (石塚遺跡)

この遺跡は、昭和45年7月～46年8月にかけて発掘調査が行われ、奈良・平安時代を主とした竪穴住居跡が多数確認されました。古墳時代中期の竪穴住居跡の多くは石製模造品製作工房跡でした。この時期、石製模造品製作に特化した集団がこの台地上に居住していたようです。

製作された石製模造品は、白玉・有孔円板・剣形品が主体で、出土点数の比較では、050・070号跡で全体の80%以上を占め、次いで067号跡が約7%となっています。



Loc.20の遺構配置図



古墳時代中期の石製模造品工房跡(067号竪穴住居跡)

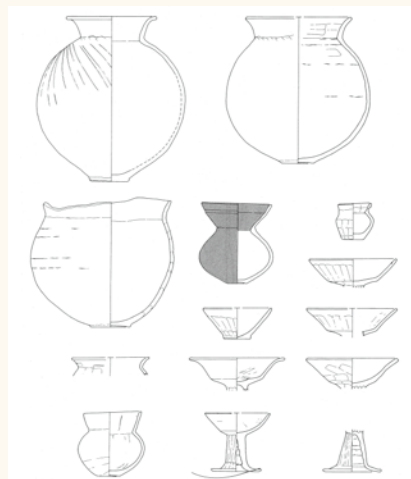


各種の石製模造品(Loc.20)

石製模造品とは、三種の神器とも呼ばれる鏡・玉・剣などを模倣して、滑石などの加工しやすい石材を使って大量に製作されたもので、製品は、主に集落や古墳などの祭祀行為に伴って使用されます。製品が用いられる期間は、古墳時代前期～後期まで比較的長期間にわたっています。

工房全体では、製品の石材となる滑石の母岩や荒割段階の石材が少ないことから、古墳時代前期の管玉製作と同様、ある程度荒割された滑石が原産地から持ち込まれたと考えられます。

Loc.20で見つかった石製模造品のほとんどは「白玉」と呼ばれるものでした。その製作工程は、まず、ある程度の大きさの石材を大きさ2cm～3cm、厚さ3mm前後の板状品に剥ぎ取り、両面を研磨します。研磨された板状品は白玉に近い大きさに分割し、方形の形割品に作り出します。この形割品の角をとって六角形または四角形の形にします。その後穿孔を加え、周縁を研磨して仕上げとなります。他の有孔円板や剣形品もほぼ同様の工程を経て完成となります。



古墳時代中期の土器(050号竪穴住居跡)

この遺跡から発見された石製模造品工房跡は、すべて古墳時代中期に限られ、しかも時期差がほとんどないことから、きわめて短期間に集中して石製模造品製作が行われようです。

完成した石製模造品は、この時期築造された天王・船塚32・33・37号墳や瓢塚47号墳などに供給されたのでしょう。



白玉の製作工程



勾玉・有孔円板の製作工程



剣形品の製作工程

Loc.20の石製模造品製作工程

瓢塚古墳群

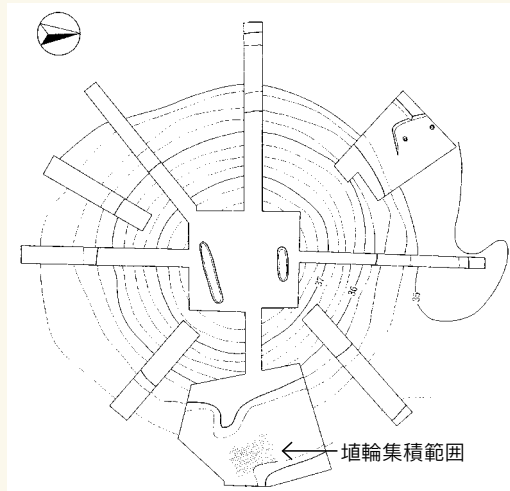
成田ニュータウン地区内に所在する古墳群は、南から、瓢塚古墳群、天王・船塚古墳群、八代台古墳群の3群で構成されています。これらの3古墳群を総称して公津原古墳群と呼んでいます。

瓢塚古墳群は、4世紀後半に小さな方墳が確認されますが、本格的な古墳の展開は、瓢塚32号墳が築造される5世紀後半以降となり、中心は6世紀後半～7世紀前半と考えられます。この古墳群中の最大の古墳は、現状保存された全長52mの前方後円墳である瓢塚古墳(瓢塚5号墳)で、ほとんどは中小の円墳や方墳で構成されています。

瓢塚32号墳

墳丘径27mの中型の円墳です。墳頂部に木棺直葬の埋葬施設が2基並んで発見されました。南側の埋葬施設は、長さ6.1m、幅0.7mで、石枕1点のほか、鎌・刀子・鉄鏃などが出土しています。出土土器・石枕・埴輪の様相から、5世紀後半に築造されたものと思われます。

この古墳では、埴輪の出土状況が注目されています。墳丘東側の4.5m×2.5mの長方形の範囲に、破砕された状態で密集して置かれていました。しかもその中央に人物埴輪の頭部が据え置かれています。何の目的でこのようにしたのかはわかりませんが、かなり意図的な行為と考えられます。



瓢塚32号墳全体図



南側埋葬施設内石枕出土状況



長方形に集積された埴輪片



集積埴輪内中央の人物埴輪(頭部)

そのほかの古墳



瓢塚16号墳

一辺13.6mの小型の方墳から出土した獣形鏡です。表土下0.6mで鏡のみが発見されましたが、この位置に埋葬施設があったものと思われます。



瓢塚17号墳

直径25m、高さ2.5mの中規模円墳の墳頂部下約0.8mから単独で見つかりました。蕨手文(乳文)鏡と考えられます。



金銅製の鈴

瓢塚40号墳

周溝内側で、東西15m、南北11mを測る長方形墳で、埋葬施設が位置する南側で周溝が1mほど突出した特異な形をしています。筑波石(絹雲母片岩)で構築された箱式石棺内から金糸・木芯金銅張柄頭など、周溝内から金銅製の鈴3点が出土し、小さな古墳ながらも、当時としては一級品が副葬されていました。



壺鏡(堀越知道氏撮影)

瓢塚39号墳

一辺20mほどの東西にやや長い方墳で、軟質砂岩で横穴式石室が構築され、入口付近から壺鏡や鞍金具などの馬具が発見されました。



瓢塚27号墳

一辺23mの東西にやや長い方墳で、南側周溝に開口する複室の横穴式石室が構築されています。石室入口側の周溝から、底面に墨書した須恵器の長頸瓶が出土しました。

天王・船塚古墳群

天王・船塚古墳群は、瓢塚古墳群の北東側を中心に広く展開する古墳群で、前方後円墳4基、円墳33基、方墳9基のほか、長方墳と思われる特異な古墳(船塚古墳、現状保存)が1基の計47基で構成されています。この古墳群は、全長86mの船塚古墳(天王・船塚1号墳)や全長60mの前方後円墳である天王塚古墳(天王・船塚31号墳)など比較的大型の古墳を含んでおり、公津原古墳群中では最も有力な古墳群となります。

古墳群が築かれた時期は、6世紀前半～7世紀前半頃までと考えられます。

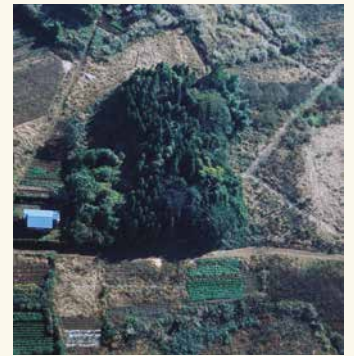


船塚古墳航空写真

船塚古墳(天王・船塚1号墳)

公津原古墳群中で最も大きな古墳が船塚古墳です。現在、赤坂1丁目の赤坂公園内に保存されています。発掘調査が行われていないため詳細は不明ですが、採集された埴輪からは、6世紀中頃の築造と思われます。

周囲に長方形の周溝がめぐっていることなどから長方形墳に近いですが、具体的には明らかになっていません。



天王塚古墳航空写真



天王・船塚4号墳全景



天王・船塚4号墳石室内馬具等出土状況

天王塚古墳(天王・船塚31号墳)

墳丘長63mの前方後円墳で、船塚古墳に次いで大きな古墳ですが、調査歴がないため詳細は不明です。採集された埴輪からは、6世紀後半の時期が想定されます。現在、山林内に保存されています。

天王・船塚4号墳

墳丘径17.5mの変則的な帆立貝形古墳で、軟質砂岩を用いた横穴式石室が埋葬施設として構築されています。石室内からは、直刀や鉄鍬のほか、鏡や銜・帯金具などの馬具が納められていました。



横穴式石室全景

天王・船塚34号墳

墳丘はほとんど残っていませんでしたが、直径21mほどの小さな円墳で、軟質砂岩を使った横穴式石室が掘り込まれ、床には筑波石が敷かれていました。石室前面からは、須恵器の瓶類が多く見つかっています。



天王・船塚8号墳石室



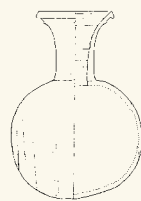
土師器杯



須恵器平瓶



須恵器壺



須恵器長頸瓶



天王・船塚34号墳出土土器



金銅製の鈴

天王・船塚8号墳

全長29mの帆立貝形前方後円墳で、石室内から、鉄製品や玉類とともに整いな金銅製の鈴が発見されました。

公津原の埴輪と埴輪窯

公津原古墳群で埴輪が出土した古墳として報告されたのは、瓢塚32号墳のみでしたが、天王・船塚古墳群中で現状保存されている船塚古墳及び石塚古墳・天王塚古墳の3基の大型古墳で埴輪が採集されています。大型古墳の埴輪の比較から、石塚古墳が6世紀前半、船塚古墳が6世紀中頃、天王塚古墳が6世紀後半と想定され、石塚古墳→船塚古墳→天王塚古墳の順に築造されたようです。



瓢塚32号墳の埴輪

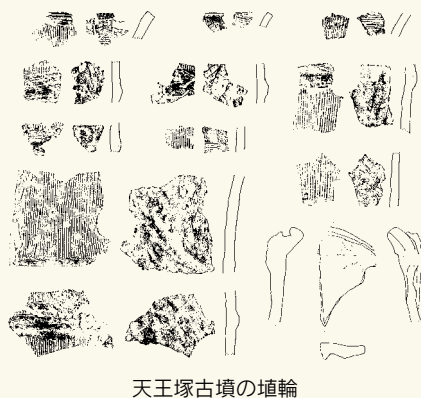
出土した埴輪はほとんどが円筒埴輪で、ほかに朝顔形埴輪・人物埴輪・にわとり形埴輪などがみられます。埴輪の出土状況はきわめて特異で、人物埴輪を中心に据えて、きれいな長方形の範囲に集積されていました。

円筒埴輪は、復元された個体からすると、3条4段の構成で、最下段がヘラナデ調整される共通の特徴をもっています。ほかの古墳と比較しても、タガの突出度が高く、公津原古墳群中で最も古い時期、5世紀後半の所産と考えられます。

また、公津原遺跡群で調査された埴輪窯で焼かれた埴輪とは異なる製品であることから、近くに別の埴輪窯が存在していたか、他の地域からもたらされたことが想定されます。

大型古墳の埴輪

船塚古墳の円筒埴輪は、タガの突出度が低いものの、薄手の端正な作りであることから、6世紀中頃のものと思われます。一方、石塚古墳は、丁寧な口唇部の作りや古墳の形などから、船塚古墳より古く、天王塚古墳は低いタガなどから、船塚古墳より新しく考えることができます。



埴輪窯跡(Loc.51)

千葉県内で2例しかみつからない埴輪窯跡の1基で、船塚古墳に近い斜面に構築されています。地下式の無段式の^{あな}窖窯構造で、全長は16mとなります。窯内から出土した円筒埴輪は、4条5段の構成を採用しており、この規格で統一されています。近隣の古墳出土の埴輪と比較すると、船塚古墳例が最も近いものと考えられます。

奈良・平安時代の新たな土地開発と信仰(1)

公津原遺跡群における奈良・平安時代の集落は、Loc.14 (中台遺跡)・Loc.15 (加良部遺跡)・Loc.20 (石塚遺跡)の3遺跡に集中して所在しています。この中で、古墳時代後期の集落が確認されるのは中台遺跡で、6世紀末～7世紀末にかけて小規模な集落が形成されています。一方、中台遺跡と谷を挟んで位置する加良部遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡はほとんど見られず、奈良時代の8世紀前半になって本格的な集落が出現してきます。中台遺跡から加良部遺跡へ入植した集団の新たな開発が想定されます。一方、中台遺跡や加良部遺跡とはやや離れた位置にある石塚遺跡は、古墳時代中期以降無住の地となり、加良部遺跡同様8世紀前半に突如として集落が営まれる特徴をもっています。この地の開発も新たな集団によって行われたものと思われる。

さらに注目されるのが、加良部遺跡と石塚遺跡で調査された四面に^{ひかし}廂の付いた掘立柱建物跡の存在です。このような建物は一般的に格式が高く、当時の役所や寺などの中心的な建物にみられます。加良部遺跡では、「忍?保寺」・「大/寺」・「新/寺」など、石塚遺跡では「忠寺」・「延忠」・「寺成」など、この地に建てられていた寺の名称と思われる墨書土器が見つかっており、四面廂建物を含む大型の建物群は集落内の寺と考えることができます。

Loc.14 (中台遺跡)

古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡143軒、掘立柱建物跡6棟などが調査されました。集落の出現は、6世紀終わり頃で、7世紀～8世紀にかけて小規模ながらも安定した集落が継続しています。その後の9世紀前半～中頃に集落規模が大きくなるものの、9世紀後半には急速に減少しています。

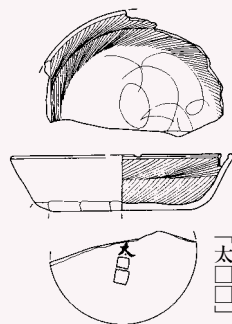
この遺跡からは、注目される墨書土器が出土しています。「太□□」は、畿内から直接搬入された8世紀初めの畿内産土師器に書かれています。また、「檜前」は、9世紀前半の土器に書かれています。「檜前」は、現在の奈良県高市郡明日香村の南部に大字檜前という地名があります。古代の高市郡に「檜前郷」があり、この地域は、朝鮮半島からの渡来人が多く居住したことで知られています。中台遺跡と高市郡檜前郷との関係は不明ですが、整美な畿内産土師器の出土などを含めると、何らかの関係も想定できそうです。



畿内産土師器(内面)



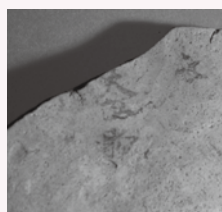
墨書土器「檜前」(側面)



畿内産土師器実測図



墨書土器「檜前」(内面)



畿内産土師器墨書土器(赤外線写真)

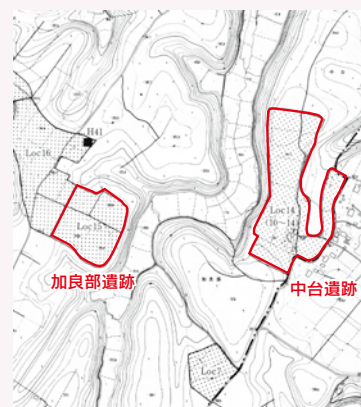


「檜前」出土竪穴住居跡(009A)

Loc.15 (加良部遺跡)

加良部遺跡は、中台遺跡の西側の谷を挟んだ台地の先端部に位置しています。古墳時代の終わり頃から平安時代にかけての竪穴住居跡66軒、掘立柱建物跡16棟などが調査され、中台遺跡に比べて掘立柱建物跡の比率が多くなる傾向にあります。7世紀後半～8世紀前半まではきわめて小規模な集落ですが、8世紀中頃以降に本格的な集落が姿を現すようになります。9世紀代に入るとさらに集落規模が大きくなり、特に9世紀中頃にピークを迎え、この頃、集落内に四面廂建物を中心とした「寺」が建てられています。集落の終息時期は、中台遺跡同様9世紀後半頃となります。

この遺跡の大きな特徴は、奈良時代になって突如として大きな集落が営まれることにあります。それまでほぼ未開の地であった台地を切り開き、仏教という新たな信仰を集団の絆として開発を推し進めていった様子がうかがわれます。



加良部遺跡と中台遺跡

奈良・平安時代の新たな土地開発と信仰(2)



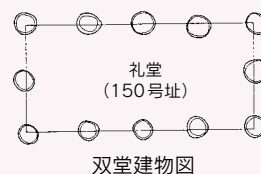
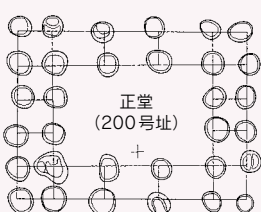
加良部遺跡航空写真



加良部遺跡全体図(『千葉県歴史資料編 考古4』より転載)



双堂建物(北西から)



双堂建物図

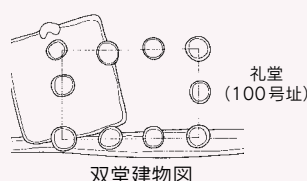
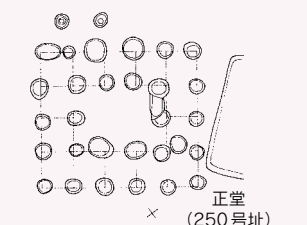


墨書土器「忍? 保寺」031号竪穴住居跡

Loc.15 (加良部遺跡)

この遺跡では、台地の縁辺部に2棟の建物跡が軸をそろえて建てられています。北側が四面に廂の付く掘立柱建物跡で寺の正堂、南側は横長の側柱建物跡で礼堂と考えられます。このような建物配置を「双堂建物」と呼び、この時期に寺が整備され、盛大な法会が執り行われたものと思われる。

この建物の近くにある1軒の竪穴住居跡から、「忍? 保寺」・「大/寺」・「新/寺」と書かれた墨書土器が見つかっており、集落内ではこのような寺名で呼ばれていたのかもしれない。



Loc.20 (石塚遺跡)

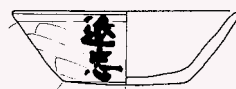
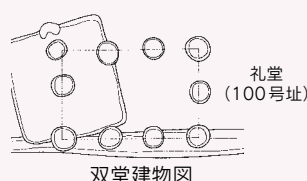
石塚遺跡は、加良部遺跡から北西に1.3kmほど印旛沼側に寄った台地上に位置しています。当初は小規模な集落でしたが、8世紀終わり頃から9世紀にかけて寺を含む建物が整備され、にぎやかな集落景観となります。この集落も、9世紀終わり頃には台地上から姿を消しています。

この遺跡でも、加良部遺跡同様、双堂建物が確認されていますが、ほかにも四面廂建物1棟と僧坊と思われる細長い建物が1棟見つかっています。それぞれ建築方位が異なっていることから、場所を変えて建て替えが行われたようですが、最も整備されるのは、双堂建物と僧坊がL字状に配置された時期と考えられます。

北側の竪穴住居跡から、「延忠」・「忠寺」と書かれた墨書土器が出土しており、加良部遺跡の「忍? 保寺」同様、「延忠寺」と呼ばれていたのかもしれない。



250号四面廂建物跡(南東から)



「延忠」



「忠寺」

墨書土器



温石

温石ぬいしとは、熱くした石を布や綿などで包み、冬季に体を温める暖房具のことで、現在のカイロに相当します。一方で、単に暖を取るだけでなく、温熱自体に医学的効果があるため、僧侶による布教に伴う医療行為にも使われたのではないかとされています。

発掘調査による出土例は少なく、八千代市上谷遺跡や白幡前遺跡などで確認されています。石塚遺跡の温石も他の遺跡とほぼ同じ大きさで、重さは1.7kgです。石塚遺跡での寺の存在と温石の関係は注目されます。

※報告書では「石塚遺跡」とされているため、本書及び展示では同じ遺跡名を使用しますが、『千葉県歴史資料編』などこの遺跡の奈良・平安時代の遺構を扱う際には、「山口遺跡」としています。当該期の遺跡名としては、「山口遺跡」が一般的です。

奈良時代の梵鐘

「宝亀五年」銘の梵鐘

この梵鐘は、造成工事中に偶然発見されたもので、重機によるゆがみや欠損が著しく残ってしまいました。昭和52年に国の重要文化財に指定されており、指定名称は、「八代椎木出土梵鐘」とされています。ところが、「椎木」という字名は八代になく、大字「船形」の小字として確認されます。『成田市史』や『成田山霊光館(史料館)報』には、船形から発見と明記されており、梵鐘発見地は船形となる可能性が高いと思われます。

梵鐘は、高さ41.7cm、口径29.6cmの大きさです。乳の下の池と呼ばれる区画の1区画に5字4行の鑄造段階に陽刻された銘文がみられ、「以宝亀五年/二月十二日/肥前国佐嘉/郡椅寺之鐘」と書かれています。宝亀五年は西暦774年で、奈良時代後半となります。このことから、肥前国(佐賀県)佐嘉郡にある椅寺が所有していた梵鐘が、いつの頃かはわかりませんが、何らかの理由でこの地に持ち込まれたことが想定されます。

奈良時代の銘のある梵鐘は、ほかに国宝となっている3例があるのみですが、この3例は池の区画に銘を入れてはいません。また、竜頭と撞座の配置が平安時代以降の様式となっており、奈良時代から平安時代へ移行する段階の梵鐘ではないかと考えられています。



郡椅寺之鐘
肥前国佐嘉
二月十二日
以宝亀五年

梵鐘の銘文



梵鐘(国立歴史民俗博物館提供、原品同館所蔵)

新たな高塚信仰

天王・船塚11号墳(経塚)

この経塚は、発掘調査の結果、一辺13m、高さ2.7mの方形の塚で、9段にのぼる丁寧な段築が行われていました。経筒は、塚頂部の表土下から、永楽通宝や小皿とともに発見されました。

経筒は、筒内に経文を納め、笠状の蓋をかぶせていたものですが、蓋部分は失われていました。その大きさや銘文からみて、「六十六部廻国納経」のためのものであることが指摘されています。六角形の形や銘文などの特徴をもつ経筒は、室町時代の終わり頃の16世紀後半に集中しており、本経塚の例も同様の年代と考えられます。

銘文からは、紀州(和歌山県)の廻国聖の快賢上人が『法華経』をこの経筒に納めたことがわかります。



天王・船塚11号墳(経塚)全景



経筒出土状況(塚頂部)



左側面

正面

右側面

三十番神
当年今月吉日

〔釈迦坐像〕
奉納経王二国十二部

十羅刹女
紀州之住快賢上人

※『千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ(考古資料)』では、「十二部」と読んでいますが、「十六部」となる可能性もあります。

展示関係略年表

	世紀	時代	主なできごと	公津原の各遺跡とできごと
35,000年前		旧石器時代	氷期が続く 狩猟や採集をしながら移動生活	人々が住み始める
13,000年前				東内野型尖頭器関連資料 Loc.9(向台遺跡)
10,000年前		縄文時代	草創期 土器をつくり始める	
7,000年前			早期 狩猟や採集の生活が続く	
6,000年前			前期 本格的なムラがつくられ始める	
5,000年前			中期 大きな貝塚・ムラができる	
4,000年前			後期 晩期	小規模な集落が形成 Loc.39(八代玉作遺跡)
2,500年前		弥生時代	前期 稲作が始まる	
2,300年前			中期 環濠集落の出現、房総でも稲作開始	
2,000年前	1世紀		後期 各地に小さな国が誕生、身分の格差	小規模な集落が形成
1,900年前	2世紀			北関東系の土器 Loc.40(外小代遺跡)
1,800年前	3世紀			
1,700年前	4世紀	古墳時代	前期 ヤマト王権の確立 奈良に出現期の古墳がつくられる	玉作りを中心とした集落の出現 Loc.40(外小代遺跡)
1,600年前	5世紀		中期 倭の五王の時代 各地に巨大な前方後円墳がつくられる	石製模造品製作を中心とした集落と古墳の形成
1,500年前	6世紀		後期 群集墳の盛行	Loc.20(石塚遺跡)、瓢塚古墳群、天王・船塚古墳群
1,400年前	7世紀	(飛鳥時代)	645大化の改新	
1,300年前	8世紀	奈良時代	710平城遷都	移住者による新たな開発と集落の出現 Loc.20(石塚遺跡) 整備された集落の寺 Loc.14(中台遺跡)、Loc.15(加良部遺跡)
1,200年前	9世紀	平安時代	794平安遷都	奈良・平安時代の集落の衰退
1,100年前	10世紀		940将門の乱平定	
(鎌倉時代省略)				
	15世紀	南北朝時代	1467応仁の乱	
		室町時代		
500年前	16世紀	戦国時代	1590豊臣秀吉全国統一	新たな高塚信仰、経塚と経筒
400年前	17世紀	江戸時代	1603徳川家康征夷大將軍となる	天王・船塚 11号墳(経塚)

●発行日：平成28年7月15日

●編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809-2

●印刷：株式会社エリート情報社